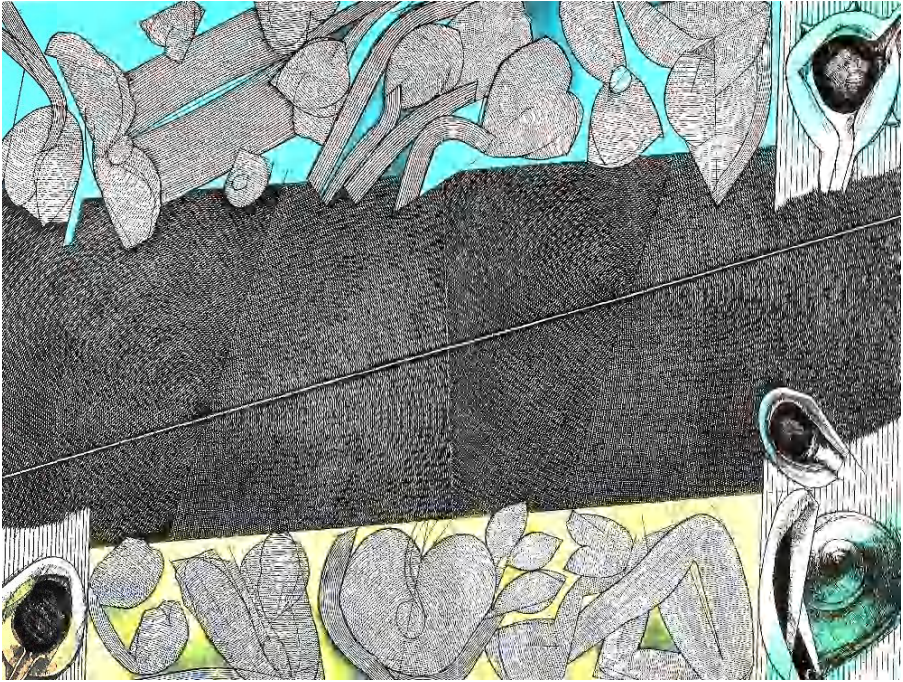


# 白金葎

12月号



290 博物誌19-1 Natural history'19-1 2019年



令和元年12月発行 第104号

定例会会（毎月第三金曜日）

一月十七日（金）第三正午～三時…当季雑詠五句

二月二十一日（金）第五正午～三時…当季雑詠五句

三月二十日（金）コビアン正午～三時…当季雑詠五句

十二月例会会報（'19 / 12 / 20 8名欠4）

光成高志

冬すみれニ翼莢にびつしり種

聖護院大根を洗ふまるまると

源氏香を聞かばや師走香体験

稚児に蹤く親も正装おん祭

縄跳びの子の宙に居るよき姿勢

佐藤宏之助

月並みの句を繰り返し年暮れぬ

鐘楼にはや縊り強き注連を張る

煤払ふ格天井の天女より

手賀沼の岸に令和の枯尾花

本堂の鉄扉を鎖し煤払ふ

光みち

冬の雷キューポラ映画観てあれば

落葉降るふる一人一枚投票す

四つ切と半切白菜立てゝ売る

これがあの伽羅の香聞く十二月

雁の声子供の声と響き合ふ

田宮敦子

公園の時計十二時十二月

手鞠並び一葉しのび冬館

白孔雀の絵観てをりぬ冬ぬくし

子供等は遊具に登り冬うらら

冬たんぼぼ河原を走る紅白帽

磯目健二

霧晴れて梢の柿に日の光

霧の沼坂上の町まだ眠る

小春日や籠の小鳥の水遊び

初生りの三つ浮かべて柚子湯かな

冬麗や拾ひ歩きの道が延び

浅野正美

真つ向を見て枯れに行く雀蜂

飯田孝三

鳥群れて空家の庭の木守柿

秋空に一の字書きて飛行機雲

少女五人和太鼓披露文化祭

翡翠色顔出す銀杏茶碗蒸

これからも安否確認賀状書く

土屋 健

飴なめてスマホ繰り合ふ冬日向

松村幸一

牡蠣食へばフェリー出て行く港町

山一面黄色となりし蜜柑山

牡蠣筏宮島沖にひっそりと

早朝にクレーンの音す牡蠣筏

年毎に枚数減りし賀状書く

増田陽一

エスカレーターが乗せゆく落葉かな

槇田健三

手にとまりこれより冬の蠅といふ

螻蛄の歩道に死すを跨ぎ来し

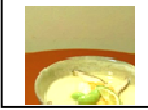
聖夜地下街もつと深くに冬の蟻

年を経しわが存念も笹鳴きす

葱刻む更新か返上かはて

十二月借りたる本を読み急ぐ

義理ひとついまだ果たせず年つまる



寒い朝登校の子の弾む声

枯茄子風に吹かれて日が暮れる

尾崎 昇

一句鑑賞

光成高志

翡翠色顔出す銀杏茶碗蒸

正美

銀杏は茶碗蒸しの定番である。上の写真は銀杏が載せてあつてその色がよく見えるので引用してみた。普通は具の一つとして中から顔を出すので掲句のような表現になる。翡翠色の銀杏、翡翠<sup>かわせみ</sup>の羽根の色が所謂翡翠色なのだが、宝石としての翡翠の色でもある。この石の説明するとなると、日本列島の誕生まで遡る。糸魚川の翡翠が有名でこの石が青森の縄文遺跡から出てきたと報道されたこともある。言葉の背景の豊かさや食べ物という身近さの取り合わせが佳句の所以だと思えます。

鐘楼にはや繕り強き注連を張る

宏之助

除夜の鐘を搗く鐘楼にもう注連縄を張ってそれを待っている。私は昔詣でた三井寺の弁慶が引き摺った痕がある大鐘を思い出す。ここでは二十八日に注連縄が鐘楼ぐるりに張られ除夜の鐘を待つそうです。但し二〇〇〇円

の冥加料を納めなければ撞けません。繕り強きという形容詞がこの注連縄に必要かどうか鑑賞していて気づいた。煤払ふ格天井の天女より

宏之助

寺の煤払いは格天井の天女の絵から払っていく。煤を払うと言っても天女をやさしく撫でてみるだけである。浅草の浅草寺の格天井らしいが、正しくは天人<sup>あまびと</sup>である。この絵は先に見た山種美術館での川端龍子が描いた絵である。接する龍の絵より天人の絵に笹竹が行く心理を僧と言えども備えているのである。

早朝にクレインの音す牡蠣筏

健

海に近い旅館に泊まった早朝クレインの音が聞こえてくる。海には牡蠣筏がびっしり広がっている。そういう風景を早朝という時間とクレインの音のみで表現した佳句と思います。今書き継いでいる芭蕉の句の代表句、古池の句のエッセンスが現代風に捉えられているのです。

これを広島湾の牡蠣筏とすれば、更に想像が広がる。すなわち、先の東北の天津波で広島湾の牡蠣筏が全滅して途方に暮れていたのを、広島島の牡蠣業者が筏を造って復興に一役買ったという美談が残されているからである。これがあの伽羅の香聞く十二月

みち

聞香の体験にて香を聞いたあれが伽羅木の香であったのだと後から教えられて納得してその香を思い出してい

る句です。たまたま十二月であつたけれど、微妙にその香体験に心引かれるものが十二月の季語で表現できません。香の説明は長くなるので省略しますが、私の源氏香をITで検索され、ば香道が茶道華道書道に通じている日本の伝統芸術だとおわかりになるでしょう。

### 十二月八日餡パン二つ買ひ

孝三

十二月八日は開戦日、八月十五日は終戦日です。開戦日は私の産まれる半年前の事で、はやというか、もうというか、七十八年前のことです。それにぶつけてきた言葉が餡パン二つ買ひということ。その餡パンに全部思いを集約させて何も書かない。もの言わぬものもの言わせた俳句らしい句である。ただ、餡パンと終戦日の取り合わせはみちさんの句にあり、その翻案とされかねないので、木村屋の餡パンに触れるのをあきらめた。

### 一句鑑賞

磯目健一

### 熱爛や生き下手ふたり生き残り

孝三

一向に処世術も心得ず運にもとんと恵まれない、うだつの上がらない一生をお互いに送つたが、なんとか無難に暮らしてきて、気づけば職場の人間で今も生きているのはお前と俺だけ。縄暖簾でかつての同僚と久しぶりに酌み交わす酒の味は、同期の桜ならではものがある。

### 鐘楼にはや繕り強き注蓮を張る

宏之助

注連縄は不浄を防ぐ神聖の標し。歳末、繕りを念入りに強くかけた注連縄が、鐘楼の軒柱に張つてある。衆生の煩惱を消すため百八回も撞く除夜の鐘の用意は、すでに調つていたのであつた。

### 樑やわれにて終わる男系

幸一

樑は一名親子草ともいい、新年を飾る子孫繁栄の縁起物。元旦を迎えて我が家の行く末を思うと、吾のあとを継ぐ男子家系が居ないことに気づく。息子は結婚しないで生涯独身のつもりらしい。今日深刻化する社会問題に自ら直面している老人の苦衷に満ちた感慨。継続を象徴する樑と現代的断絶の取り合わせだが、意味するものは大きい。このままゆけば四〇年後には日本の人口は八千万人台になり、次世紀初頭には四千万人台になる。

### 鳥群れて空き家の庭の木守柿

正美

空き家には鳥が集まる。無人の庭の渋柿の梢でつべんに残つた柿の実一つ。やがてはそれも群れ鳥の餌食になるにちがいないが、また天高くポツンと照り映えている。真つ向を見て枯れに行く雀蜂

陽一

意を決したように真つ正面へ向き直つて巢のある枯れ

葎へ飛んでゆく雀蜂。冬が深まると、雀蜂は女王蜂以外すべて死滅して世代交代をする。この働き蜂に待っているのもその運命。死に場所を目指して飛ぶのである。

エスカレーターが乗せてゆく落葉かな

幸一

人を乗せるエスカレーターに街路樹の落葉も乗っている。寒風に路上を吹き飛ばされて、出入り口から温かい地下内部へ。あたかも安住の地を得たように。晩秋の都会の片隅に見る点景。

十二月八日館パン二つ買い

孝三

昭和十六年師走の早朝、ラジオの臨時ニュースが「帝国陸海軍は本八日未明、西太平洋においてアメリカ、イギリス軍と戦闘状態に入れり」と慌ただしく国民に告げた。続報は真珠湾攻撃。そして七十余年後の今、米国と戦争したのを知らない若者もいる。当時の小学生は紀元節で学校からもらう紅白饅頭が楽しみで、まして館パンは垂涎のもの。その思い出を忘れられない老人が同じ思いの妻の分も買って帰宅するのである。ロストジェネレーションの大昔の開戦日に寄せる感慨句である。

一句鑑賞 (一〇三号分)

松村幸一

帰り花帰らぬ人もあるものを

昭七

たとえば多勢の句会でこういう句が回って来たとして

ら、ぼくは思わず手を止めることだろう。オートマチックもどきの手送りする選句作業がおぞましくさえなってくるのだらう。滅多に出会えぬ思いの深い一句にはそういう働きがあるのかも知れない。この作者には季題を基本とする俳句の考え方作り方に対する根源的な懷疑乃至ノーとする見解がある。けれども季題とは何より人の心の感動の結晶語であるという歴史的前提と体験がなかったら、どうしてこのような一句が生まれて来よう？作者の多分かねてからの自説を裏切つての玉吟一句にぼくは心から拍手。何なら作者と作品との間には背反する不思議なドラマがあるらしいと興味ふかく言い添えてもよからうか。

受贈誌 (令和元年十二月号)

煤逃げの角打ちしたる見沼衆 (東京クラブ12月号) 理佳江

観世音黄葉明りに立ち給ふ (〃) 〃

化け地蔵七十余体冬の苔 (〃) 万世遊

枯尾花冥し懶き時の過ぎ (〃) 璃子

夢覚めてこの世の朝の寒さかな (〃) 文男

帰り花花見し時の間に日の畢る (〃) 璃子

新宿のラーメン店の大熊手 (〃) 栄

芭蕉のかるみ以後 (58)

光成高志

芭蕉の軽みの心境を書かんとして貞享三年春に至った。ここに来るまでの芭蕉の年譜を見ると一日として精進を怠った事が無いことが容易に想像される。江戸に下って来るまでは、発句が続山の井などの俳書に公刊されて俳人として生きて行こうと決意し、いやその前に主君に死別して此一筋に繋がるかと回顧しているように23才の時人生の岐路に立たされての決意だった。江戸では俳諧師と交わり上方の西山宗因歓迎の百韻に一座したり内藤風虎邸に出入りしたり、俳諧師として万句興行をして宗匠として世に立つて生活していた。それでも経済的にはきびしく神田上水道水上総払いという水道工事の事務方を務めていたことも分かっている。宗匠として桃青門弟独吟廿歌仙を刊行して意気軒昂たる俳諧師を自負したこともあるが、俳諧の真実を追求することと離れていく世の宗匠達の中に己もいる事を粉碎してくれたのは荘子に触れたお陰であった。その実証的史料が延宝八年に集中している。後の芭蕉の書簡にこの時の俳壇の実情を述べたものがある。風雅の道筋に三等あるとして、下位から二段の実情を読むと芭蕉がいかに苦しい思いに駆られていたことか分かる。現代のテレビ俳句もそうであるし結社俳句も芭蕉の苦々しい点取り俳諧と変わらないのではないか。それはさておき、先に書いた延宝八年暮れの深川移

住の項(28)(29)を推敲を兼ねて又読んでみたが、その必要はないと思つた。荘子を読んで芭蕉は大明眼を開いたのだと書いたが今でもそう思う。その草稿中では田中桐江のことを重視していなかったが、池田市まで桐江の墓参に行ったりして考えたことだが、延宝八年に若い田中桐江から荘子を講じてもらい、これだと膝を打って荘子に傾倒していったのではなかるうかと思う。後世の私は芭蕉の年譜を知る事が出来るので、芭蕉の人脈、読んだ古典などから想像が自由にできる。これはほんとに幸せだと思う。栗田勇著の芭蕉では延宝八年の田舎の句合、常磐屋の句合が突然と思える荘子への傾倒であると書いてあるが、そのきっかけは田中桐江にあつたし、それより前に仏頂禪師と接触があつたらしいのが効いていると思う。延宝二年に仏頂(三十二歳)が鹿島根本寺21世の法統を継ぎ、鹿島神宮々司が寺領半減を策したため仏頂、其の還元のために提訴せんと江戸に来て、深川大工町に仮寓す、ということが分かつており、その時まだ小田原町に住んでいた芭蕉が桃青芭蕉と名乗る前の名宗房と接触があつたという逸話が残っている。その逸話は名僧僧正と書いてある仏頂との対談や否は不明として広く知られていない。その逸話は長い文章なので、要約するとこうである。芭蕉と同じ町内小田原町に住んでいた

頃ある人の父がその頃の名僧僧正に帰依す、この老人が  
且暮宗房子の仮居に来て、僧正の教訓を対話した。宗房  
子元来五塵六欲を捨て、無常心乾坤の外に独歩し風姿を  
樂しまんと思い給う志なれば萬法歸一の旨にその心相  
あう、それより彼の老人が宅へも宗房子を招き入れた。

この僧正は稟性世に勝れさせ給い、外見も実質も彬彬た  
れば、老若とも尊敬され、来り交われる者の心卑賤なる  
ものは自ら恥じて来なかつた。老人には仏教を対話し、  
若者には親義別序信を説き聞かせ、幼い者には温公の幼  
慈、孟宗が釋孝など、その他に様々を語つて曰、先ず手  
跡をよくせよや、筆は半学なのでと言われたがいつもの  
莞爾たるに皆随い申した、この時延宝九年（元年の誤りか）  
春の頃なり。（略）始めは宗房彼の老人に伴われ僧正へ参  
り相まみえた。それより追々教誡御對話数度に及ぶとこ  
ろ、いつしかより宗房参らざりければ、僧正人をして訪  
ね給うに、漸く参られ、僧正と対話された。僧正曰、ど  
うして来なかつたのかと、宗房答えて、久しくお伺い申  
さず様を申しますと人払いをさせて夜話し給う。宗房曰、  
さて僧正のお弟子絶門させ給いし旨を承り、それより参  
らざりしとなり、僧正曰、それはどうしてだと訪ね給い  
ければ、其の答え、僧正は今天下の名僧たる事、世挙げ  
て尊ぶ処なり、されば広大に名號を書かせ給い、普く世

上に是を與へ給う、諸人は是を尊ぶ事限りなし、然るに御  
弟子疑筆の名號世に触られし事あり、僧正へ是を申者あ  
り、僧正聞召、甚だ是を憎ませ給い絶門させた給いし由  
世に評する処左なりや、僧正曰實に左なり、宗房重ねて、  
一旦の過ちは挙げていい難し、御忿はうべなり、然れど  
も普く名號を弘めさせ給う事は、誠罪教導の御建立なれ  
ば、疑筆をも僧正を尊ぶ程にこそ、思し召立ての御建立  
繁榮の基とこそいふべけれ、又疑筆をもすべき程の御弟  
子才広しと見給はゞ左までの御忿は有るまじ、惜哉僧一  
人すたれること大なる処なり、只今まで僧正を慕い参ら  
せし事□□予が愚かなるに似たりと、その後は等閑に参  
らざりし、我も聊か道の建立に心を置申せば、と跡は語  
り給はざりし、僧正御手を打たせ給い、善い哉々々吾あ  
やまてり、絶えて久しき者に逢いて過ちを改めたり、房  
が温潤今我耻づと、頓て御弟子を尋ね給い、師弟の間本  
の如しとなり。（貴僧物語より）以上目黒野鳥編の芭蕉翁  
編年誌（昭和33年一九五八）から引用して私なりに訳して  
右に載せた。あの栗田勇著の芭蕉でもこの凶書は参考文  
献として載っていない。随分昔神田の古本屋で見付けて  
買ったもので、虚子にも贈呈して其の礼状を巻頭に掲げ  
てあるのでこの本を信じてここに載せた。私は文献の真  
贋を疑うよりそのまま信じて、芭蕉が思った通りに追体

験することが先ず先決と思つて文献を読んでゐる。それが私の読書態度である。右の文献の文章は古語で書いてあるところが多いので訳を書くよりそのまま書き写したところが多いのもそういう態度からである。そして右線をつけた言葉は仏教用語らしいのでその説明を次に書く。五塵六欲の五塵とは、煩惱を起こさせて心を汚す塵の意で色しきし香しき味しき触しきの五つ。六欲は、凡人の持つ六種の欲望すなわち色欲、形貌欲ぎようみようよく、威儀姿態欲ゑいぎそたいよく、語音声欲ごおんしょうよく、細滑欲さいこつよく、人相欲をいう。萬法とは一切の存在は因縁によりて生ずる自然の理法であり、一とは万物の根源であり、大宇宙のすべてのものは一から生じ、一に帰するとされる。その唯一絶対の当体はそのまま萬法に貫く道理でもある。従つて萬法帰一とは天地万物のすべては唯一絶対の根源的真理に帰入することをいい、また森羅万象の一切はそれぞれに根源としての真理の道理が貫かれているとする。仏教ではこの一を眞如しんによといひ法性ほつしょうといひ一心といひ自性清淨心じしやうしやうじやうしんという。仏頂和尚を訪ねた鹿島詣に人をして深省を發せしむと吟じけむ、しばらく清淨の心をうるに似たり、とあり、眞如の月見をして悟りを開いた気がしたと書かれてある。仏教用語をこうして説明している文章がちつとも進まない。親義別序信とは、父子有親、

君臣有義、夫婦有別、長幼有序、朋友有信、という儒教における五つの基本的な人間關係を規律する五つの徳目名号とは、仏や菩薩の称号を指すもので、浄土眞宗では南無阿弥陀仏を六字名号としている。以上で右線を引いた言葉の意味を略述した。これらを踏まえてもう一度先の逸話を読んでみると、仏頂禪師は生まれつきの性質が勝れてゐて、又見かけも実質もともによく君子のような人であつたので老若ともに尊敬され、心卑しい者は自ら恥じて来なくなり、老し者には仏教を對話し、若い者には親義別序信の儒教の徳目を説き聞かせ、幼き者にはやさしく、孟宗の幼き頃の孝行の話などを聞かせた外、皆先ずきれいに文字を書く練習をせよ、筆は私はよく知らないけれどもいつものようににっこり微笑むので皆随ひ申した。この時は延宝元年春の頃であつた。その老人が宗房の家に来て、仏頂の教訓を話した。宗房は元來五塵六欲を捨てもののはれを知つて乾坤の外に独歩し風姿を樂しまんと思つておられた方なので、一切のものは眞如の一つの旨に帰一するという心と合致してそれ以來その老人の家にも招き入れられた。(略) 始めのうちは宗房はかの老人と共に僧正へ参り、相まみえ、それから追々教誡を御對話数度に及んだが、いつしか宗房が来なくなつたので僧正は人を遣わして訪問を促したところ、

漸くにして参られ僧正と対話された。その後の話は、弟子の一人が名号を勝手に書いて世に振れ回したことがあったのでこの弟子を絶門にした。これを宗房がお怒りは尤もだけれど名号を引めさせたことになるので疑筆であつても、僧正を尊ぶ程にこそその思いは繁采の基と言つていいのではないでしょうか、又疑筆をもすべき程の御弟子の才能が広いとみられれば、そんなに怒られなくてもいいのではないのでしょうか、僧一人廃れさせる事は惜しいですよ、今まで僧正を慕いきたこと私の愚かだったと言われるのに等しいと思ひ、その後はいい加減にして参りませんでした、私とて聊かこの道の建立に心を置いていますのに、と後は沈黙された、僧正御手を打たれて善い哉善い哉我あやまてり、絶えて久しき者に逢つて過ちを改めたり、宗房の温順今我恥ずかしいとてすぐにその御弟子を訪ねて師弟の間を本に返した。と現代語に訳してみたが、まだ硬く重いことばにしかならないのは浅智短才の所為である。僧正にも宗房にもこの貴僧物語の作者は敬語を用いていることに注意したい。小田原町に住んでいた頃とあるので、延宝元年のことと思われるが、そうだとすれば宗房三十歳、仏頂三十一歳のほぼ同い年である。二人は肝胆相照らす仲だったのではないか。上の萬法帰一の精神は後のその貫道するものは一なりに通

ずるし、後に紹介しようと思つている養虫説跋に書かれている他者と自意識との対立をアウフヘーベンし、宇宙の混沌とした様をそのまま真理として受け入れる立場である。莊子の万物静かに觀ずれば皆自得すという一句の境地そのものであつた。松の事は松に習え、竹の事は竹に習え、私意を離れよといふ事也といふ芭蕉が言つたという言葉そのものである。

道のべの木槿は馬に食はれけり  
辛崎の松は花より臍にて

の野ざらし紀行のこの句は、主觀と客觀を超えた莊子の物化斉同の結実したものである。莊子の万物一体というのは先の(57)に書いた風雅の誠である。俳諧における宇宙的原理的全肯定の思想である。これは現代の科学でもつて私なりに考へるともの自体は突き詰めて行けば分子原子原子核つまり量子とよばれている素粒子から出来ているので万物皆一つである。一元的なものを見ればあなたも私もない。主觀も客觀もない。これは般若心經に書かれてある、色即是空空即是色是諸法空相つまり空の思想である。これを釈迦は悟られたのではないか。莊子は空を彼なりに書いているのではないか。私は貞享三年春の蛙合の一卷に書かれた第一番、左  
古池や蛙飛びこむ水の音  
芭蕉

右

いたいけに蝦つくばふ浮葉哉

仙化

此ふたかはづを何となく設けたるに、四となり六と成りて一卷にみちぬ、かみにたち下におく品、おのくあらそふ事なかるべし。

この蕉風開眼の句と喧伝されている句を紹介しようと思つてこんなに長い前書きになつてしまつた。

### 俳窓評論纂

\*野村研三選の千葉俳壇の特選句(211) 白菜の巻く音日の音風の音(滝次男の選後評言が載つた。野村研三さんの評は、白菜の巻く音日の音風の音と三度重ねたリフレインの句となつているが、音としてしつかり聞こえてくるものはない。強いて言えば、かそけき風の音ぐらいで、白菜の巻く音もしつかりと耳をそばたてなくては聞こえそうもない。ここで詠まれる音は実際に聞こえなくてもよく、心の中で聞く音。日の力、風の力などの自然の力によつてすくすくと育つた、と長い評をしてある。佳作の中に、先月のみちさんの持つて行けの句と同じもつてけの句があつて面白い。この句では4音なので、とをつけて5音にしている。ここで書きたかつたのは、古池や蛙飛びこむ水の音とこの白菜の巻く音の句は同質のものだということである。尾形仍氏の芭蕉シンドブックではこの蛙飛びこむ水の音は円錐形の体型

から殆ど聞き取れない。芭蕉は心の耳でその無声の音を聞き止めたのである。一句は古池に象徴される世間から忘れられた静かな隠士の草庵にも、確かに訪れた陽春の鼓動を心の耳で聞き止めた喜びを詠んだもの。古来云々と鳴くではなく音を聞きつけ、宇宙の生命の発動を捉えたところに新しい俳諧性がある。としている。心耳で聞いたということが冒頭の白菜の句と同じなので取り上げたまで。来月の軽み以後で音の芭蕉の句を取り上げる。

\*増田陽一個展が銀座シロタ画廊で開かれた。私は新宿から移動して作品を拝見した。帰り増田陽一全作品集という写真集を頂いた。一九七〇・二〇一九年までの主要作品レリーフ作品・全版画カタログ・レゾネ(総作品目録)が掲載され、巻頭巻末に陽一さんの美の遍歴を版画芸術編集主幹松山龍雄の評釈、美術史家坂本満、瀬木慎一、仏文学者奥本大三郎の寄稿文を載せた、いわば増田陽一全集である。本誌でも何回かエッセイの中で蝶採集紀行を紹介したが、この本では、スラウエシ蝶採集紀行が掲載され、最後には年譜、受賞歴がある。無論表紙には自作品、中表紙には陽一さんのアトリエでの写真が載っている。前号で私の友人の画風などに付き同じようなモチーフで己に飽きないのかと生意気なことを書いたが、陽一作品は初期から常に変化をきてきた新たな工夫がなされていることが分かる。銅版画に至るまでは石膏デッサン、石膏レリーフからローライ転写技法を生み出し、モアレが生ずる線刻の組み合わせ

から陽一独特のエッチングとなり最近ほ蝶や植物の葉や芽を多く取り入れられている。ここで説明するより最新の作品を転写して表紙に掲げた。私が注目したのは、陽一さんの自作品について所思の中に「自然と人間の照応 (correspondance)」という画面が出来れば良いと思います」と述べられてあるところです。これを読んで陽一さんの肺腑まで覗いてみたような気がした。今読んでいる栗田勇著の芭蕉の中に象徴主義の詩人という一章があり、著者は correspondance (万物照応 福永武彦訳) を解説して、これを日本詩歌に解すれば、芭蕉の掴んだ不易流行の俳論に辿り着くし、道元の正法眼蔵の世界に通しているとか。ハタと気づいたのは10頁に書いた荘子の物化斉同であり、万物一体であり、素粒子論から見れば主観も客観もない般若心経の空の思想に行き着くではないか。先の照応の洋文字はフランス語である。ボードレルの詩集「悪の華」をよく読んでこの万物照応を考えてみたいがここで早急に何やかやとは書けない。後の宿題としたい。

\*佐藤宏之助さんの第二句集「欠渡り」を頂いた。平成十四年から今年までの十七年間の句の一千二百有余句から自選して四百九句を収められた句集である。私がここ新木に越してきてからの年月の間に早第二句集をもにされた。あとがきによれば皆吟行句であり、俳句は吟行以外にないと思つてゐるとある。自分の足で歩き、自然を確かめる以外にないと思つてゐるとも。私もそう思つてゐる。本誌の春

秋の吟行句会には毎回お出まし下さる。やつぱり誓子先生の実作者の言葉を実践されておられるのに、大きな拍手を送りたい。大急ぎで通覧し目にとまった句のみ左に抜き書きしてみた。

万緑の武蔵野に来て墓地を買ふ  
煙突を立て穀殻の山を焼く  
玫瑰が咲く監獄の構内に  
煤払ふ格天井の天女より  
野火がうがう太陽火塗れ煤塗れ  
雁が音や吾は一親のこゝろ知らず  
胸に背に赤兎を括り火を渡る  
真つ黒でふかふか春の土うなふ  
武蔵野の櫓も樸も芽吹きたり  
荒磯まで打ち寄す能登の青田波  
飾り羽なびかせ金黒羽白鴨  
花影に長谷川一夫の小さき墓  
尺蠖が攀つ天平の丸柱  
涅槃突く迦陵頻伽は尾を立てて  
キャンパスの守衛と御慶交しけり  
本誌に発表された句もかなり自選されているのは本句会を信頼されておられる証しかと思ひます。

お便り広場

光成さんの仰る通りに他人の目や批評を気にしています。素な自分になれという忠告を受け入れて私の句の幾つかを送信します。根本さんとの俳句交信記録の中から選びました。紫陽花が迎えてくれる遍路旅」 定年になって女房とバスで四国遍路をしたときのことを思い出したものです。外階段段ごとの一輪花」 ウォーキング中に見かけた光景です。 幸手の土手桜と菜の花競い合い」 東京単身赴任の時に幸手市の桜の名所に行った時の光景です。土手の上に桜並木、土手下に菜の花が一面に咲き誇っていた。桜のピンクと菜の花の黄色が鮮やかだった。 維新のおもかげ探して萩の旅」 数年前ですが、女房と山陰の萩に行きました。萩城跡や木戸孝允の自宅跡や萩藩を支えた豪商邸跡等を巡りました。 台風一過青いビニールシート点々と」 台風後の千葉県の被害を詠みました。 安曇野の香り運んで栗が来る」 次女の金子琢磨一家（琢磨君の両親が買われた敷地に住んでいる）が住む安曇野の敷地に2〜3本の栗の大木があり、たくさんの栗を送ってくれました。 秋うららフェリー行き交う瀬戸の海」 ウォーキングで行った宇品の広島港の風景です。 秋日和昼なお暗し杉並木」 日光へのウォーキングで例幣使街道を歩いた時、杉の大木で道がうす暗い様子を詠みました。 小山さんの追悼文ですが、送れるのであれば添付にて送信お願いします。 (112) 健)

白金葎」7月号届きました。小山さんの追悼特集を読ませて頂きました。表紙の写真の小山さんはいつものこ

やかな顔ですね。小山さんは神様のような人でした。小山さんほど他人への気配りをされる人は滅多にいないと思います。私は東京単身赴任をしましたが、その折には、いろいろとお世話になりました。私が囲碁が好きなので、小山さんの立花の自宅に呼ばれ、小山さんの親戚で囲碁ができる人も呼ばれていて、その方と対局をした思い出があります。帰りにお土産として新品の靴下を頂きました。根本さんも新人の時には実務でいろいろと教えてもらったと言っておられました。構造関係の人は何らかの形で小山さんにはお世話になっていると思います。会誌を読むと 白金葎」の会にも小山さんは貢献されていたんですね。その他にも多くの人の世話をされていたのだと思います。小山さんから年賀状を頂いていましたが、手書きで葉書いっぱいに文を書かれていました。何人の方に年賀状を出されていたのかは判りませんが、交友から考えて凄く人数ではないかと思えます。私のような人間にも手書きで葉書にびっしりの文を書かれていたので、他の方にもびっしりとはいかなくても、ある程度の文は書かれていたことでしょう。全員に書くには多くの時間と体力を要したことでしょう。小山さん程、自分のことは後にして他人に尽くす人間は殆ど見かけません。本当に惜しい人を失いました。間違はなく天国へ行かれたことでしょう。小山家から喪中で新年の挨拶は遠慮しますとの葉書が届いています。小山京子さんと永井恵子さんとの連名となっていました。永井恵子さんは娘さんだと思いま

すが、きつと小山さんの血を受け継いでいることでしょう。小山さんと同様に素晴らしい女性だと思います。長々と書きましたが、深夜になりましたのでこのあたりで。へんではなくマウスを置きます。会誌有難うございました。(127健)

朝晩寒くなりました。みなさん元気ですか。この前手紙をもらったのですが、入院をしていたので返事が出せなかったのですみません。少しばかりですが、くわいを送ります。哲治ですが母の面倒をみています。けんかをよくしています。体に気をつけて頑張ってください。ちぎり絵上手ですね。

(124澄子)

(あねよりの慈姑の色も翡翠色

(高志

)

今年もあつという間に師走に入りました。白金葎受け取りながら何か忙しくしていました。お変わりありませんか？私は元気です。皆さんおえらい方ばかりで私ごときが入る余地もないように思います。

・義理(と)ついでまた果たせず年つまる(友人に頂き物)

・十二月借りたる本を読み急ぐ(図書館の本)

短日や寒さ身にしむウォーキング(毎日の運動)

更新をするのか返すのか免許証(もう少し乗りたい)(12.9健三)

(印はOK。線引きの言葉は再考という印。この調子で沢山書いてみて下さい。それから私の住所の〒番号は270です。高志

拝啓 寒気が厳しくなってきましたが、お元気でお過ごしですか。白金葎十一月発行号受け取りました。日展の絵ハガキも送っていただき、有難うございました。私

方野菜づくりや絵の教室へいったり、運動をしたりのお生活をしています。先日文化団体連盟で島根県にある安野光雅美術館に行ってきました。そこで買った絵ハガキをお送りします。俳句は文末に書きましたので、添削をお願いします。貴会へ気持ちだけ寄付します。お受け取り下さい。寒くなります。ご自愛ください。敬具 (1217昇)

寒い朝登校の列弾む声

枯れ茄子風に吹かれて寂しそう

(せつ々なので直して会へ欠席投句、選にかけます。)

光成高志様光 みち様 師走残り半月ほどになりました。十一月も何やら忙しく白金葎拝読やつとでお礼のお便りもままならず、今日になりました。十二月の句会もどうやら出席、忘年会に出られました。盛沢山の二〇一九年も終り、来年はどんな年でしょう。知っているようでよく解らなかつた二つの言葉舌を噛みそうで又忘れるかも。①ビーガン、ベジタリアンを更に進み玉子牛乳その製品を食べない。②パラリンピック、ごく普通に見聞きしやべっていました。その造語はオリンピック十。パレプレジア(下半身マヒ)今ごろ感じているなんてお笑い下さい。郁子、アケビに似てるのでは。昔お花を習った頃花材で使いました。落花生、なつかしい言葉。新物が出ると白っぽい袋に赤字で落花生とあり夜店で売って

ました。寄席で皮をむきながら食べ、音でおこられた人もあつたそうです。庶民的な昭和初期のあたりからの面白話少しは知っているかも知れません。上野公園西郷像あたりではキヌカヅキ ユデタマゴの上に塩を白々と乗せて売っていました。どちらも皮をむく前に紙か何かに取っていたのでしょうか。不思議でした。言い古された言葉ながらお元気で新年をお迎え下さいませ。併せて「健吟を!!」

(1217 璃子)

私用のため句会終了早々に退出し失礼いたしました。主宰の投句一覧表や進行の差配のお蔭で句会はとても良かったです。体調が今一つのように見えて心配しましたが、なんとも無ければと願っています。啓泰さんの句業について三回も連載、その全容を詳述して、一人の個人的な俳人への惜別の情溢れる誄文だったことに深く感銘しました。故人もさだめて満足に思っていることでしょう。私も触発されて啓泰氏の句をできる限り総浚いしてみました。そこで主宰が実的確に評釈していることに改めて敬服しました。俳句に寄せる主宰の思いの深さと幅の広さであるとともに、人間への情愛の真率さに打たれました。私も及ばずながら主宰を先達として俳句に勤しみたいと切に思っています。

(1222 健二)

## 我孫子日記

—	11/15	例会
—	11/20	SOA
—	11/24	健さんメール
*1	11/27	千駄木
*2	12/3	北総病院
*3	12/5	坐禅
*4	12/8	慶賀香
*5	12/10	北総病院
*6	12/14	ACC-陽一個展
*7	12/16	病院
—	12/20	例会

\* 白鷺の群れが我が家の前を飛ぶ

\* 2 鯉鮠屋に〇しごと冬の雨(みち)

釣瓶落し靴弄る捜しもの(り)

\* 3 紅葉してメタセコイヤの銚が立つ

\* 4 坐禅堂へ向ふ境内霜柱(みち)

坐禅終へ冬青空の雲を見る

冬夕焼富士になだる雲を灼く

\* 5 香を聞く十二月八日よく晴れて

これがあの伽羅の香聞く十二月(みち)

\* 6 薬局へ紅葉の森の道を抜け

\* 7 暖房の部屋にモアレの渦斜見

## 編集後記

今月も都内や病院やら坐禅まで、あちこち出かけた所為で体力消耗して今風邪薬に頼って打っている。やっぱりと感心したのは源氏物語の絵合せの巻で式部も村上天皇の御記を参考にかいていること、彼女が漢文をすらすら読めた証であるが、しきたりまでは創作出来ず、そのまま取り

入れていることである。又歌合わせも行われた。それを踏まえて芭蕉が江戸に下る直前に貝おほひを刊行した。そして今書こうとしている蛙合せもその延長にある。判者に勝敗をつける歌あわせは、現代は俳句甲子園とかいつて高校生にやらせているのはご承知のことであろう。テレビ俳句もその流れにある。芭蕉はそういう点取り俳句を克服して独自の蕉風を打ち立てたものであつて、そこに現代俳句が焦点を当てないのは何故だろう。みなみな易きに流れる風潮が蔓延しているのだろうか。年末にまたややこしいことを書いて今年の締めと致します。

追記・余白ができたし、新たに三人の方の投句がありましてので、私の俳句の存念を追記しておきます。どうか参考とされ、俳句を作つて、投句下さるよう願っています。

今月たまたまですが、十二月八日の日付の入った句が左のように三句出てきました。

もし話し出せば果てなし十二月八日

十二月八日 鶴。ハンニつ 買ひ

香を聞く十二月八日よく晴れて

作者名はここでは書きませんが、全体を通読されればおわかりになると思います。もし話し出せばと切り出した句は作者の思いをありのまま少し大げさに書かれたのでしょう。次の鶴ハンニつ 買ひの句は、以前本誌に あんぱんのよう な雲あり終戦日」が発表されているので、これをちよいと開

戦日に代えて書いたのではないかと勘ぐられる弱点があります。三番目は香を聞いたのがたまたま十二月八日であつただけの句でしょう。しかし十二月八日が七十八年前の開戦日であることを思えば、読者はそこから立上る感慨をそれぞれにお持ちになるでしょう。作者の思いを想像して読者なりの鑑賞ができます。それは作者がまじめにその季語と向き合つていることが読み取れるからです。そこに本歌とか類句とか何らかの介在物があると句の自立性、つまり作者の思いやもつと言えば個性が傷つけられます。そういう意味で日々の生活の中から新たな発見をされる句作にお励み下さい。自分の為に作るのです。点取り俳句はそれだけのことで生きる知恵には繋がりません。

白金 十二月号 (通巻第一〇四号) 令和元年十二月二十三日発行  
編集・発行人 光成高志 二七〇・二一九我孫子市南新木二四一七  
表紙の題字・加納綾女 写真は増田陽一レゾネから引用 版画&十二月二十一日の白金霞